

反面ロールモデル



高橋かより

産業技術総合研究所計量標準総合センター計量標準普及センター国際計量室
[305-8563] つくば市梅園1-1-1
総括主幹, 博士(工学),
専門は微粒子計測, 高分子分子量計測, 標準開発.
k-shimada@aist.go.jp

www.nmij.jp/, www.aist.go.jp/

「ロールモデル」という言葉があります。女性の社会進出を語る時、日本ではロールモデルが少ないと言われる。幸運なことに、私の人生では常にそういう方がいました。幼稚園から始めて小・中・高等学校の先生、大学生になってからも、工学部にもかわらずすでに女性の先生方がいました。まちがもなく全員が夜空の金星のように輝いて見えました。そして、愚鈍な私は次の瞬間に思うのです。「私には、絶対無理だ」と。

大学院の博士課程を出てポスドクをしているときに、つまり、パーマネントな職に就いていないうちに、私にはすでに子供が二人いましたし、おおよそ計画的な人生とは言い難い人生を送ってきました。そして、「ああ、私にはやっぱり無理だった」と思うような出来事も複数回ありました。主人は、本当によく子供の面倒を見てくれました。男性の育児に対して世間がその認識すらもっていない頃、まだ「イクメン」などという言葉も流行っていなかった時代ですから、不利益も多かったことと思います。同年代の女性の「うちの旦那ぜんぜん子供の面倒見てくれないのよ」という愚痴を、私自身がびくびくして聞いていました。

ロールモデルと言われるような人は、現在は案外多いのではないかと思います。その中で私は、間違いなく、「ああは、なりたくない」の実例です。しかし、よく考えてみると、「ああ、なりたくない」という希望より、「ああは、なりたくない」という思いの方が現実的には心を支配していることが多くないですか。ふらついて歩いている酔っ払いを見ては「呑み過ぎないようにしよう」と思ったり。

原点に立ち戻って考えてみると、子供を産むということは女性にしかできませんし、その意味では男性側が差別されていると言えます。そして、家事や子育ては、人生をかけて行うに足る立派な務めです。たとえば、男性が二つの会社に同時に勤めるのは至難の業であると同様に、そもそも何かの片手間のできることでないでしょう。どんな偉大な先人も、その人を生んだ母親がいなければ存在し得ないのです。赤ん坊にお乳をやることは母親の特権で、父親にはできません。この特権は、女性であってもさまざまな理由で行使で

きない方もいるわけですから、使わないのは、もったいないことだと感じます。

さらに、日本について言えば、自分が貯めてきたお金から年金が払われるシステムにはなっていません。高度経済成長時代を境に、年金のツケを若年層に押し付けるシステムに無理やり変えてしまったせいで、「私はずっと働いてきたから自動的に年金がもらえる」などと呑気に考えていられなくなりました。子育てに無理解な上司がいたら「あなたの年金はあなたが過去に払った分が返ってくるわけではなくて、将来のこの子らが稼ぎ出すのだ」と言ってあげてください。日本国内の年金システムの拙さや、少子高齢化、諸外国の経済発展を考えると、片親が外で働いて、もう片親が家にいて家事に勤しむという美しい日本の伝統は、すでに破綻してしまったようです。これからの若者は夫婦二人して、上がらない賃金と睨めっこしながら、日々の糧を稼ぐために、老人たちを養うために、あくせく働かざるを得ないでしょう。不憫なことです。

若い頃の私は、輝いているロールモデルを見ては、「私には無理だ」と感じ、今まで何回も「もう仕事は辞めよう」と思って来ましたが、でもなぜ辞めなかったか。それは、山のように世話になった多くの方々に申しわけなかったからです。学校の先生も、大学時代の指導教官も、職場の上司や先輩も、一生懸命に私に生きていく方法を教えてくれました。それらの人たちにとって、自分の時間を割いて私に教えてくれたことが、ご自身に直接見返りとして来ることは、おそらくないでしょう。私が辞めてしまったら、それらが受け継がれることなく雲散霧消する。それではあまりにも不義理ではないか。そう思えてなりませんでした。

そして、もう一つ。「仕事」も「私事」も、どちらか一つを選択し、邁進する勇気が私にはありませんでした。「仕事」も「私事」も、必ず躓きや挫折がある。そのときに、もし片方しかもっていなかったら、それらを乗り越えることが私には決してできませんでした。

ぜひ、「ああは、なりたくない」と思ってください。それで、少し楽になれたらとても幸いです。それでも辛くなったら、こう思ってください。「悪いほうに転がったとしても、まあ、この程度なんだな」と。